

退職にあたって

渡邊訓甫

昭和 47 年春佐賀大学に着任して 39 年が経ちました。佐賀大学に着任した当時は佐賀駅も木造で、駅舎を出たところにポツンと立つ案内所(?)で佐賀大学への道を訊き、相応循環とか右回りとか言われて何のことかさっぱり解らなかったのを思い出します。佐賀大学も正門からの風景は一時代遡ったかの如くでしたが、理工学部のキャンパスに近づくにつれて近代的なビル群が姿を現し、安堵したものです。学長から辞令を交付される時「土木が一番奥で、静かでいいでしょう。」と言われたのですが、目の前を南部バイパスが開通したばかりで、その騒音は窓を閉めても電話ができないほどでした。もっともその後、鬼塚先生のご尽力により土木工学科棟は学内でも最初に二重窓と冷房機が設置され、教育研究環境はかなり改善されました。今でこそ、何の疑問もなく全室にエアコンが設置されていますが、当時はエアコン無しが普通でしたから隔世の感があります。

さて、昭和 47 年というと土木工学科が設立されてまだ間がなく 3 年生が最高学年でしたから、喫緊の課題は翌年から初めて開始される卒業研究への対応準備でした。私は水工学分野の担当者として着任したわけですが、実験用の水路が一本もなく、学生実験、卒業研究のためにまず実験水路や高架水槽を含む水の循環システムの構築に手を付けました。その後、昭和 63 年までに大型の実験水路を含めさらに 3 本設置し、学生実験と研究体制の充実を図りました。概算要求で実験水路が認められた際、建家(水理実験棟)も付いてきたのは望外の喜びでした。

研究は、主として沖積河川の流れと流砂が対象で、浮流砂、sand wave、流水抵抗などについて理論と実験の両面からアプローチし、学生時代からひたすら水路に水を流して過ごしてきました。最初の卒業研究時にはなんとか小さいながら水路を一本用意できましたが、計測機器はなかったので、九大から技術職員の方付きで乱流計測器一式を借り受けて、寒い実験室で徹夜の実験をしたのが佐賀大学での最初の研究でした。パソコンが研究室に普及してくると数値シミュレーションも比較的簡単にできるようになり、河川の洪水解析、クリークの流況解析などを通して水の流れがどうあるかについて様々な角度から考えることができました。宮崎県北川での大水害を契機に開始した北川研究は、出水の度に調査に入るなど 10 年に及び、いい経験をしました。

この 3 月 11 日に発生した東日本大震災は終戦後の荒廃以来の危機的な状況であるともいわれており、土木学会も早速「東北関東大震災特別委員会」を立ち上げ活動を開始しました。楠志会諸氏も困難の中で業務遂行、支援・復興活動等に尽力されていることでしょう。私も微力ながらできることがあればお手伝いしたいと思っています。最後に、被災された方々に心からお見舞いを申し上げ、一刻も早い復興を願うとともに、都市工学科・専攻の活躍・発展を祈念いたします。